

四谷の

千枚田だより



第 234 号

梅香の山里 〜その変遷〜

昭和初期(六年頃)、海老町は経済厚生事業の一環として梅栽培を奨励した。

当時、農地は農作物生産の場として重要視されており、梅の木を畑地に植栽するにはいささかの抵抗があり、土手や斜面、沢脇などに点在的に植えられた。

そんな時、丁塚の「一加」、大林の向山(来宝寺)は畑地に小梅を植え、収穫に至った昭和二十七年頃には経済成長が起因し、収穫する小梅は「青いダイヤ」とも呼ばれ、「一加」の小梅、「向山」の小梅として引く手数多の人気で大儲けをした。一方、土手や沢脇に植えた梅は「梅なら何でもいい」と品種に拘らずやたらと植えたことから管理も行き届かず、「味」も劣り、売れるものの注文が殺到するほどの成果はなく、「一加」や「向山」の先見の目に、ただただ指を咥えるほか致し方がなかった。今、あちこちで見られる古木がその名残りであり、一般的に「やぶ」と呼ばれている。

海老駐在所の寺本忠男巡査が「この土地には梅が適している。私の在所・和歌山県日高郡南部川村は梅の産地であるから一度見に行ったら、案内する。」と言われ、昭和三十七年に川売の夏目与一、横畑孝好、大林

の古田友七、方瀨の原田浩、丁塚の加藤久夫、副川の小林信一、坂神元氏たちが海老農協の坂神辰雄氏を案内役として鳳来タクシ二台で寺本巡査の在所に二泊、先進地視察を行った。

翌年、先進地を視察したメンバーは「白加賀」、「長束」、「小梅」の苗木をそれぞれ五十本づつ南部川村から取り寄せ植えたのが旧海老町の梅の本格的な栽培の始まりである。そして、収穫した生梅は単価も良く、いくらでも売れた。

川売集落「梅の里川売(かおれ)」川売には3本の川(棚山・往還窪・



長野の窪)が流れており、その川の流れが温度変化を呼び起こし、川霧となり、梅林中を漂う。また、四方山に囲まれた谷底で日照時間も短い(十一時に朝日が昇り、三時半には日が陰る)。こうした立地条件が、梅の特性を満たし、「皮の薄い」梅の品質向上に役立っている。筆者は新美術協会(会友)に所属。「川売の梅や猿岩」を東京都美術館に出品。(その作品は現在でも山びこの丘伝承館に展示してある)また、朝日新聞主催の「にほんの里100選」に四谷の千枚田と川売の梅の里の二箇所を応募、川売は選定されたが四谷の千枚田は落選した経緯がある。

(川売は市観光課からも応募)

そもそも、川売集落はコンニャクの生産地として波に乗っていた(大儲け)地域であったが、連作を嫌う作物と大暴落で衰退。元々、野猿の出没地で「梅なら猿も食べないだろう」とも、梅林転作の一要因であったであろうし、今になって三月の「梅花まつり」には観光客が大賑わいをみせ、梅の加工品も売れるし、美味いと云って注文もくる。川売も梅を植えたおかげで、めでたしめでたしである。

方瀨集落

かつては八軒の農家が梅栽培を行っており加工場も設け、丸物百貨店(豊橋市)の奥三河特産品コーナーでも販売、「丸八の梅」として盛況を極めていたが、丸物も撤退、現在は加工場も閉鎖。一部梅農家は清酒「空」でお馴染みの関谷醸造に「梅酒」の原料として出荷している。この地も、小高い急傾斜地に梅園が広がり、知る人ぞ知る、隠れた絶景ポイントでもある。

四谷の千枚田周辺

石積の棚田を彩り、梅香が漂う様は、日本の山村集落の形態を残し、訪れる人々の心をホットさせるようなあたたかい雰囲気を感じさせる和(なごみ)の里である。一時期は「古宿の梅」として盛況を博していた。TV撮影(リーダーズ)の折には「梅の枝、一本折れば百万円…」等々、威勢のいい言葉も耳に入ったほどである。



そうそう、川売も四谷の千枚田も田んぼに梅が植えてあり、観光客などが「田んぼに梅なんか植えて、勿体ない」など、身勝手なことを聞く。これは昭和四十六年に施行された「減反政策」で稲作転換を余儀なくされたものであり、好き好んで田んぼに梅を植えた訳ではない。それは、それなりの事情があったのことに、よく考えて物言ってもらいたいものだ。(チクツ)

四谷集落協定勉強会

二月十七日、連谷会館において中山間地域等直接支払四谷集落協定（村雲伸一代表）は活動の一環として愛知東農協職員二名を講師にお招きして勉強会を行った。

○営農部 高木勤係長

化学肥料「尿素、リン酸、カリウム」の三要素の原料はリン酸四割を除き他はほぼ輸入であり、政情不安定（ロシア）によるウクライナ侵攻の影響で価格が高騰しているが、本年の稲作肥料については確保できている。などのお話があった。

疑問：肥料の三要素は窒素（N）リン酸（P）加里（K）と認識していたが、窒素は尿素に変わったのか？

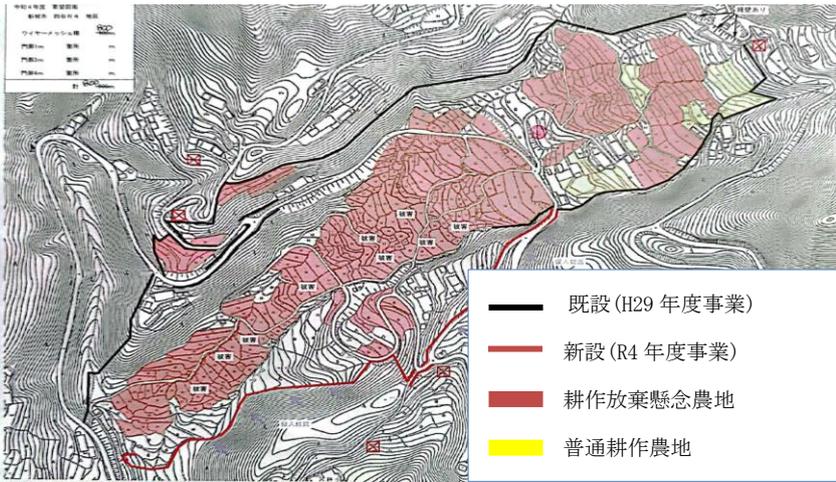
○金融共済部 佐々木剛課長

農業者賠償責任共済、イベント共済、新たに登場した損害賠償責任保障など、万一の事故などに対する安心の保証などについて丁寧な説明を受けた。

獣害対策

侵入防止柵の設置

年間を通して、山林から侵入するイノシシやシカによる水稲と果樹を中心とした農作物被害が発生していたため、平成二十九年度に交付金を活用し、地権者の了解を得られたところは耕作地の外側を侵入防止柵で大きく囲むことで被害を防ぐことができた。しかし、当時、地権者の了解を得られなかった防止柵未設置エリアから侵入するイノシシやシカによる被害が多発している。これは、生息密度が高まったこと、未設置エリアから侵入可能であること、学習がすすんだことが原因と思われる。



そこで、これ以上の獣害被害が発生した場合、農家は耕作意欲を失い、耕作放棄が懸念される。侵入防止柵の効果は歴然で、未設置エリアからの侵入を食い止め、「四谷の千枚田」を保全するため、「鳥獣被害防止総合対策事業自立施工侵入防止柵」の設置要望を耕作者の総意で林 義明を代表として奔走していただき、令和四年度事業として採択された。施工は二月二十六日、三月五日に延長八百坪（赤線で示した）を設置した。



林代表は「いろいろあったが、何とか念願がかなった。ありがとうさま、ありがとうさま」と、今日に至るまでの苦勞が感謝の言葉に滲みでていた。ご苦勞さまでした。

「つなぐ棚田遺産」感謝状

農林水産省は令和四年二月十四日、全国でも優良な二百七十一の棚田を「つなぐ棚田遺産」として選定した。

農林水産省は棚田地域における多様な主体との連携や協力を促進することを目的として、棚田地域の振興等に貢献する企業・大学等の取組を評価し、優れた取組を実施する企業等に「未来へつなぐ」部門、「人と人をつなぐ」部門、「クリエイティブ」部門の三つの部門に分けて、三十九企業等に感謝状を贈呈した。「未来へつなぐ部門」に「四谷の

千枚田」の未来継承と環境保全に大きな力（千枚田五平餅としての古米買い上げ・絵画コンクール・リアル案山子・千枚田盛り上げ隊など）を頂いている（棚丸八製菓に感謝状が贈呈された）。贈呈式は三月九日、新城市役所本庁舎で（棚丸八製菓、愛知県農林基盤局農地部、愛知県新城設楽農林水産事務所、新城市鳳来地域課、千枚田保存会から関係者が出席。「贈呈式プログラム（リモート）」に添って行われた。感謝状は愛知県新城設楽農林水産事務所村山所長から丸八製菓鈴木社長に贈呈された。



行 令和五年二月十五日
鞍掛山麓千枚田保存会
文責 小山舜二